

【やや黄色い熱をおびた旅人】

3

雨の女たち

1997年7月

アスマラ
(エリトリア)

原田宗典

彼女たちを見かけるのは、決まって雨の日だった。

最初はエリトリアに着いた当日のことだ。私たちは、アスマラの市街にあるボールにいた。小雨がぱらついでいて、小窓から見える風景は一面濡れそぼっていた。と言っても、見えるのは崩れかかった石造りの家数軒と、爆弾が落ちた跡のような更地だけだった。その窓際の席に座って、私はぬるいエスプレッソを飲んでた。向かいには地元ガイドのマコーネン氏が座っていて、やはりエスプレッソをちびちび飲んでる。目が合うと、彼は白い歯を見せて、

「ニガイですネ」

そう言った。何だか缶コーヒーのコマーシャルの決め台詞みたいに聞

こえたので、私は思わず笑ってしまった。それから彼の口調を真似て、「ニガイですネ」

と答えた。彼は、文字通り苦笑いを漏らした。言ってしまったてからふと気づいたのだが、エスプレッソの味わいの中には、彼らエリトリア人にしか分からない格別の苦さがあるのかもしれない。つい軽口を返して茶化した形になってしまったことを、私はひそかに反省した。

エリトリアという国は、エチオピアとの三十年戦争に突入する以前は、長い間イタリアに植民地化されていたのだ。その結果人々の食生活の中には、厭でもイタリアの流儀が取り入れられるようになった。レストランのメニューには、パスタやリゾットなどのイタリア然とした料理の名が並んでいるし、街角の喫茶店もカフェではなく、パールと呼ばれてい

る。それはそれで結構なのだが、我々旅行者としては、アフリカくんだりまで来てイタ飯を食うのかと思うと、何か釈然としないものがある。

同日、ホテルのレストランで遅い昼食をとる際にも、私たちはそのことを話し合った。まるでイタリア料理屋然としたメニューを見て、少々驚いてしまったせいもある。隣のテーブルに目をやると、木製の華奢な椅子が気の毒になるほど大いに太ったご婦人が掛けていて、皿うどんに似たパスタ料理をつまらなそうに食べていた。その様子は少なからず私の食欲を失わせた。何か地元料理みたいなものはないのかな、と呟くと、隣で熱心にメニューを検討していた若いディレクターのT君が、

「あ、インジェラがありますよ」

と嬉しそうな声を上げた。どこでそんな知識を仕入れたものか、イン

ジェラはエリトリア料理ですよね、彼はそう言ってガイドのマコーネン氏に同意を求めたのだった。

「そうですね。エリトリアだけではありませんケド、インジェラはアフリカのこのへんの料理ですネ」

氏はちよつと困つたような口調で答えた。どういう料理なんですかと尋ねると、氏に代わつてT君が、

「何かシチューみたいなものらしいですよ。そうですね？」

「はい、そうですね」

「何のシチューですか？ ビーフ？」

「いえ、マトンですネ。ビーフはとても高いですネ」

中身が何であれ、私はその地元料理を試してみる気になった。ものは

試し、と思ったのは私だけではなかったらしく、他の日本人スタッフ三人もインジェラを注文した。ただ一人マコーネン氏だけが、ボロネーゼのパスタを頼んだ。

ほどなく黒服の黒人ウエイターが、料理を運んできた。目の前に置かれた地元料理のインジェラは、確かに見かけはシチューのような料理だった。特徴と言えば、その傍らに灰色のパンケーキらしきものが添えてあることだろうか。マコーネン氏の話だと、このいかにも不味そうな灰色のパンケーキこそが、インジェラと呼ばれるものであるという。シチューの中身は、インジェラに塗りつけ、軽く巻いて食べるのが習わらしい。私たちは早速インジェラを適当な大きさにちぎって、シチューの中身に浸し、口にしてみた。誰もが同じように複雑な顔をして、互いを

見交わした。何かの間違いで、自分の料理だけがこんな味なのか、と一瞬疑ったのである。

「……結構酸っぱいんですね」

T君が控えめに感想を漏らすと、マコーネ氏は含み笑いで、

「そうですね。スツパイですね」

と答えた。確かにその味わいは、良く言えばヨーグルトのような、悪く言えば腐りかけたブラウンソースのようなものだった。何も知らずに口にしたら、吐き出していたかもしれない。どうやら酸っぱさの原因は、シチューではなく、そこに浸す灰色のパンケーキ、インジェラの味にあるようだった。試しに何もつけずにインジェラだけを食べてみると、これが思いの外酸っぱくて、ぎよっとしてしまった。マトンのシチュー自

体の出来は決して悪くないのに、インジェラの酸っぱさはその味を台無しにしているとしか、私には思えなかつた。

「何とも言えない味の料理ですねぇ」

二口、三口と食べてみてから、お茶を濁すような感想を漏らすと、マコーネ氏は少々申し訳なさそうに、そうですネと答え、

「でも私もネ、日本でナットウを食べた時にネ、やっぱり何とも言えない味ですと思いましたがネ」

と言って私たちの笑いを誘うのだった。しかしそう言う彼が注文したポロネーゼにしても、見るからに茹で過ぎでぐつたりしたパスタの上に、レトルトか缶詰らしき具が乱暴に載せてある代物で、インジェラよりも美味いかどうか怪しいものであつた。

結局私たちは全員が、昼食後に口直しをしたいと希望した。ホテルのレストラン以外で、お茶とかコーヒーを飲めるところはないのかと尋ねると、マコーネン氏はありますネと請け合った。

「アスマラの街にボールがありますヨ。行ってみますか？」

もちろん私たちに異存はなかった。彼の後について、ホテルのロビーから扉を押して表へ出たとたんに、それを待っていたかのように小粒の雨がさあつと降り始めた。遠いんですか、とT君が心配げに尋ねると、マコーネン氏は着ていたジャケットを二人羽織みたいにさつと頭に被り、

「いえ、すぐそこですネ」

言い残すなり、雨の街路に走り出た。私はナイロン製のジャンパーのフードを被って、その後続いた。ほんの二、三分の間に、雨は驚くほ

ど勢を増していった。正面から顔に吹きつけてくる雨粒が、痛いくらいだ。エリトリアは今、雨期に入りかけた時期だと、昼食の席でマコーネン氏が言っていたことを思い出す。あと一月もすると、ひどい時は洪水が起きて家が流されるほどの豪雨に襲われるのだと言う。これくらいの雨は、まだ序の口なのだろう。私たちはわずか五分ほど歩いただけでずぶ濡れになり、街角のバールに辿りついた時には、体じゅうから雨雫を滴らせていた。

濡れたジャンパーを脱いでから、改めて店内を見渡すと、そこは何とも言えず味気ないインテリアのバールだった。いや、これをバールと呼んだら、イタリア人は笑うだろう。小学校の教室くらいのスペースの床に、全面白いタイルが貼ってあり、海の家にありそうな簡素なテーブル

と椅子が、投げやりな感じに配置されている。いわゆる「パール」と呼ばれるカウンターは店の奥にあり、四、五人の常連客が、私たちのことを好奇心剥き出しの瞳で見つめてくる。カウンターの隅に置いてあるラジカセからは、FM放送の黒っぽい音楽が流れていた。

私とマコーネ氏は窓際のテーブルについてエスプレッソを、他の三人は隣のテーブルでビールを注文した。カウンターの中から出て、注文をとりに来た店主らしき男は、エリトリア人にしては大柄で、レゲエ風の髪形をしていた。おそらくこの界隈では、変わり者と呼ばれているに違いない。彼はにやにやしながら近づいてくると、にやにやしながら注文をとり、にやにやしながらカウンターへ戻った。そしてまたにやにやしなからビールとエスプレッソを運んできたのだった。

「二がいですネ」

そう言つてマコーネン氏は白い歯を見せたのだが、その心境を私は付度しかねた。自分たちを長年支配してきたイタリアがもたらした、エスプレッソコーヒーの苦さ。彼らはそれを口ではなく、胸でも味わっているのではなからうか。考えすぎかもしれないが、一旦そう思うと、私はもうエスプレッソを飲むマコーネン氏の顔を、まともに見られなくなつてしまった。

窓外に目をやると、小雨は霧雨に変わりつつあった。アスマラ市内の建物は、基本的にオレンジに近い土気色の石やレンガでできている。この窓から眺められる、崩れかけた二、三軒の建物も例外ではない。よくよく見ると、内一軒は廃屋ではなく、店舗として一応営業しているらし

い。何の店なのかは分からない。分からないけれども、その外見に惹かれた私は、バッグから小さめのスケッチブックを出して、雨に煙る建物の姿をスケッチし始めたのだった。むろん私には絵心などないので、退屈しのぎのつもりだった。しかしいざ描いてみると、思っていたよりもずっと上手く描けたので、私は少なからず好い気分になった。

そこへ、不意に左手の方から、周囲の風景にはまったくそぐわない何かが、近づいてくる気配がした。

見ると、雨の舗道を二人の若いエリトリア人女性が歩いてくる。一人は、いかにもイタリア仕立ての軀にぴったりフィットした革のパンツスーツ、もう一人は極端に短い革のミニスカートを穿いて、ニットのセーターに茶色い革のコートを羽織っていた。そして二人とも、首には純白

の高級そうなスカーフを巻いていた。浅黒い肌によく似合うそのスカーフが、風と雨に煽られて、彼女たちの襟元で翻る。いつか観た映画の一場面を、スローモーションで再見しているかのようだった。基本的にエリトリア人は男女ともに顔が小さく、手足が長い。しかし彼女たち二人のスタイルの好さは格別だった。おそらくイタリアの植民地だった時代に、かなり西洋の血が混ざったのだろう——霧雨の中を軽やかに歩く彼女たちの美しさは、遠い国から来た東洋人の胸をときめかせるものがあった。

もしかしたら姉妹なのかもしれない。着ている服の趣味ばかりではなく、彼女たちはどこか似通っていた。見るからに敏捷そうな軀か、西洋の血を感じさせる整った顔か。いずれにしろ二人は、柔らかい獣のよう

な色気をはなっていた。そしてしょんぼりと濡れそぼった辺りの風景を挑発するかのような歩き方で、私の目の前を横切っていった。時間にすれば十秒にも満たない、ほんの束の間のことだ。彼女たちの姿は、すぐ先の彎曲した交差点で見えなくなった。

大袈裟に言うのと、私は天使が通りすぎるのを目撃したような気分だった。あんなに美しい女たちがこの世にはいるのだ——私はしばらく呆然としていた。

「……見ました?」

ずいぶんな間を置いてから、私は訊いた。マコーネン氏は何か考え事をしていたらしく、きよとんとした顔を上げ、小首を傾げて見せた。

「今の女たち、見た?」

私は慌てて隣のテーブルの三人にも、同じ質問を投げかけた。彼らは明日からの撮影について打ち合わせている最中だったのだが、中の一人、カメラマンのA君だけが私の質問に鋭く反応した。

「見ました！ 物凄い美人でしたね」

私は自分のことのように嬉しくなって、そうだよな、スーパーモデルみたいだったよな、とはしゃいだ声で言った。女性誌のグラビアみたいでしたよね。そうそう、映画みたいだったねえ。私とA君は、他の三人を置き去りにして、しばらく興奮した口調で言い合った。しかしひとしきり騒いでしまうと、その後には、妙な虚しさを伴う沈黙が訪れるのであった。

小窓から見える風景を濡らす雨は、なかなか止みそうになかった――。

二度めに彼女たちを見かけたのは、翌々日のことだ。二人は他でもないアンバサダーホテルのロビーにいて、フロント脇のソファに腰かけていた。

外は、やはり雨だった。

その日の午後、私はアスマラ郊外の「戦車の墓場」という陰惨な場所を訪れたのだが、取材を続けるにしたがって、ひどくすさんだ気持ちになった。途中から降り始めた意地の悪い雨のせいもあって、私たち一行は予定よりも早く撮影を切り上げることにした。そして重苦しい沈黙が漂うロケバスに乗って、寝ぐらのアンバサダーホテルまで戻ってきたのだ。

そこへ、いきなり彼女たち二人の姿が目に見え、飛び込んできたのだ。私は、すぐにでも部屋へ戻って濡れた服を着替えるつもりだったのに、急に用事を思い出したふりをして、ロビー近辺を行ったり来たりした。適度な距離をおいて立ち止まり、壁に寄りかかった格好で、さりげなくソファの方へ視線を走らせる。二人とも、この間とまったく同じ服装をしている。もしかしたら余所ゆきの服は、それきり持っていないのかもしれない。いずれにしても二人はソファの上で、惚れ惚れするほどきれいな脚を組んでいた。何がそんなに可笑しいのか、二言三言交わしては、くすくす笑い合っている。紅をひいた唇に、白い歯がちらちら覗く。その笑顔は陽焼けした子供のようにならぬで、とても魅力的だった。

そうやってこっそり二人を観察しているところへ、マコーネン氏が通

りがかつた。ロビーのトイレを使つてきたところらしい。私はやや興奮しているせいもあつて、彼を呼び寄せるなり性急に小声でこう尋ねてしまった。

「ほら、あそこのソファに座つてる女の人たちなんだけど、このホテルに泊まつてるのかな」

マコーネン氏は私の質問を耳にすると、怪訝そうな顔でソファの二人を見やり、それからどこか気恥ずかしそうに答えた。

「ああ、あれはあのウ……シヨウフですネ」

「娼婦？」

私は愕然としてしまった。初心な奴だと笑われるかもしれないが、彼女たちがそういう職業であるとは、夢にも思わなかつたのだ。あまりに

も美しいから……：そうかもしれない。いずれにしても私は、生臭い現実をいきなり鼻先に突きつけられて、大いに戸惑った。するとその気配を感じ取ったのか、より西洋的な顔だちをした女の方が、ふと顔を上げて私と目を合わせた。そして条件反射のように、煽情的な仕種をして見せた。桃色の舌を出して、唇の上下を嘗めながら、誘うように微笑んだのだ。私は静かに視線を逸らし、見て見ぬふりをしたのだが、その実ひそかに勃起した。

一方私の傍らにいたマコーネン氏は、面倒な仕事が増えたとでもいうように溜息をもらし、妙に疲れた表情を呈していた。その横顔を垣間見て、ああそうか、と私は気づいた。自分は、彼にとってあまり嬉しくない質問をしてしまったのだ。

「……シヨウフですネ」

そう言った時の、マコーネン氏の苦しげな表情——おそらくこの街には、娼婦を生業としている女が少くないのだろう。イタリアによる植民地化と、その後の三十年にわたる戦争は、多くの兵士と多くの死と多くの娼婦を必要としたのだ。強姦や虐殺が日常茶飯事だった戦闘状態の中で、女たちは一体何をして稼げばいいのか。特に彼女たちのような混血の女性は、味方の中にあっても敵扱いされ、蔑視されたことだろう。暗がりの中でも最も暗い場所で、生きるすべを探すしかなかったのだ。

ひょっとしたら彼女たちは、自分自身の美しさに未だに気づいてないのではないか、という気がした。戦時中も、戦後となった現在も、彼女たちの存在は先程マコーネン氏が呈したのと同じ表情で語られ、疎まれ

続けているのだ。おそらくこの荒廃した国においては、彼女たちは美しくないのだ。或いは、意味のない美しさなのだ。だとしたら彼女たちは、日に何度も目にするはずの鏡の中に、何が映っているのを見るのだろうか。

一瞬、辺りの雨音が高まったかと思うと、ロビー正面玄関のガラス扉が開いて、ずぶ濡れの男が一人、飛び込んできた。背の高い、何人ともつかぬ痩せた白人だ。年は五十代前半といったところだろう。このホテルの支配人か、或いは彼女たち二人のヒモかもしれない。彼は入ってくるなり、ずぶ濡れのコートも脱がずに、まっすぐにフロント脇のソファに向かつていった。ちらりと垣間見えたその横顔は、明らかに怒っていた。彼女たちは顔色を変え、大慌てでソファから立ち上がった。そして

男が怒鳴り出す前に、二人して先を急かし合いながらロビーを横切り、正面玄関に向かった。ガラス扉が開き、再び雨音が高まる。男は何語か分からない言葉を発し、家畜を追い立てるような仕種をした。二人は小走りにホテルから出ていった。そして男は頭から湯気が立ち上りそうな顔つきで、その後を追って出ていった。

彼女たちは、雨の中へ消えていった。早く客を引いて稼いでこいとヤキを入れられたのか、それともホテルのロビーで客を引くなと叱られたのか。分からない。分からないけれども、二人はまた雨の中へ出ていった。

正面玄関のガラス扉越しに見やると、雨は激しさを増していた——。